広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本とベトナムの親の愛に関することわざの対照比較研究
Author(s)	ホアン マイ トゥ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 22期 : 65 - 72
Issue Date	2008-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038819
Right	
Relation	

日本とベトナムの親の愛に関する

ことわざの対照比較研究

ホアン・マイ・トゥ

０．はじめに

ことわざは、言うまでもなく，その国や社会や民族の文化を反映するものである。特に，長い歴史や豊かな文化を持っている世界の国々で、ことわざは日常生活に欠くことができないものである。

私は研修生として日本語日本文化の勉強のなかで、特に日本語表現の特別演習のなかで、日本のことわざとベトナムのことわざの間の違いや類以に興味を持ってきた。それで、このようなことわざの対照比較研究をすることにした。

ところで、「ことわざ」の意味は何だろうか。『事情ことわざの事典』（小学館）によると、「ことわざ」の「こと」は言葉で、「わざ」は神業、離れわざと同源で、行為やはたらきを意味するものと思われる。「言葉のわざ」が「ことわざ」の本義だそうである。

日本のことわざには中国、西洋に由来するものも含んで長い歴史を通じて言い伝えられてきた約一万五千個があって、豊かなことわざの財産を持っている。その中でも、欠けてはいけない部分は親子関係のものである。なぜかというと、日本は他の東方の各国と同じで、倫理、人間関係を重んじる社会だからである。

そこで、今回は日本とベトナムの親の愛に関することわざを以下のような項目に分けて、対照比較してみることにする。

１．親の愛は一方的

一般的に親の愛は子供に対して一方的なものと言えるが、ことわざには次のようなものが見られる。

（Ｖ１）Con liền với ruột

（子は親の腸につながる）

ベトナム語で、腸を意味する「ruột」という言葉は気持ちを表すのによく使われている。例えば、慣用句の「tiếc đứt ruột」というのは、腸が切られたようで悔しいという意味を表す。（Ｖ１）では、子は親の一部で、もし自分の子供が転んでけがをしたり何かよくないことがあったら、親は、実際には自分のものでもないのに、自分の腸が切られたようでその痛みを感じると表現している。

子は生まれて以来、いつも親の愛や保護の中に生きているのに、ほとんど感じないものである。それは例えば、ちょうど空気や水のありがたさをめったに意識しないのと同じで

ある。

（J１）親の思ふほどは思わぬ

（J２）親煩悩に子畜生

（V２）Nước mắt chảy xuôi

（涙は下の方に流れる）

などに見られるように、親の深い愛が子にはなかなか通じないということを伝えている。（J1）は親が子を思うほどには子は親を思わないという意味を表している。（V2）は陰喩表現を使って、親の心を涙の流れに比べる。涙は物理的に、地球の重力によって下の方に流れて、どうしても上の方に上がらないものである。親の愛はその流れどおりに行くということである。そして、親は子供のためにこれを思い、それを悩んでいるが、子供は普通はそのことになかなか気付かずそれほど親に対してその愛のことを思わない。（J2）の「煩悩」とは仏教で人間の心身の苦しみを生み出す精神のはたらき、肉体や心の欲望で、「畜生」は鳥獣虫魚、つまり動物である。これは、親は子供が欲しく、子供のことをあれこれと思うが、生れ出た子は親の情けを動物のように何の感じも持たないということである。

また、次のような比較もおもしろい。

（J３）子を思へど子は糞たれる

（V３）Cha thương con út, con út đái lụt chân giường

（父は末っ子を愛し、末っ子はベッドの脚に小便して洪水を起こす）

親は子を慈しみ育て、子を甘やかしているのに子はその愛情を裏切るようなことをする。両国には、（J3）と（V3）のような非常によく似た表現がある。親の恩に対して「糞たれる」や「ベッドの脚に小便して洪水を起こす」という表現がある。「糞たれる」のも強烈であるし、もちろんいくら小便しても洪水は起こされないが、（V3）と（J3）の誇張法は子が裏切るようなことをすることを強調している。

以上のことから、日本とベトナムのことわざの中にそれぞれ親子の愛情関係が見られる。両国ともに親の愛は一方的に子に注がれると述べられているが、どちらかというと、日本では親が子を思うほどには子は親を思わないということが強調されている傾向がある。

２．功利を超越した絶対的な愛

（J４）鈍な子ほどかわいい

（J５）かたはな子ほどかわいい

（J６）悪い子ほどかわいい

（J７）馬鹿な子ほどかわいい

子を生んだら、親は誰でもかわいい子が欲しいし、優れている人になって欲しいと思っている。しかし、あいにく、「鈍な子」、「馬鹿な子」、「かたはな子」や「悪い子」がいたら、親こそ苦痛である。「鈍な」や「馬鹿」は先天的なものである。そして子の全部の生ま

れつきのものは親の責任である。生れ出ることにおいて何の責任のない子が、どこかに先天的な欠陥を持てば、親としてはすまない気持ちで胸がいっぱいになるだろう。

さらに、「馬鹿」や「鈍な」にも程度は違いがあるが、両方とも頭の動きが鈍いという意味を表すものである。しかし、頭の悪い子供は誰にも素直で優しいことが多い。親にとっては、子に優しくされるほど嬉しいことはないので、そんな愚かでも優しい子をかわいそうに思って、賢い子より愛することはよくあることである。

また、「かたはな子ほどかわいい」は肉体的に不自由な子も精神的に不自由な子と同様にかわいいということを表している。

この以上のようなことわざはベトナムではないが、興味深いのでもう少し検討したいと思っている。

そして、両国でも、次のような親の愛の表現が見られる。

（J８）仲の良い他人より久離切った我が子

（V４）Bán cháu nuôi con, không ai bán con nuôi cháu

（孫を売り、我が子を育てる。我が子を売り、孫を育てる人はない）

「久離」とは、江戸時代に行われた勘当で、町奉行所に訴えて人別帳から消し除き、親子の縁を切って追放したことである。（J８）は、例えば、勘当して縁を切った仲であってもどんなに仲が良いとはいっても血のつながらない他人より、親子の情愛の方が深いと伝えている。（V４）では、ベトナムの封建時代には、ほとんどの農民は自分の子供さえ育てられないほど貧しかったので、子を売る（bán con）しか仕方がなかった。「子を売る」というのは、子をお金持ちの家に家事をしに行かせて、かわりにお金を多少もらうことであるが、実はいい条件のお金持ちにその子を育ててもらい、もらったお金をその弟妹達を育てるのに使ったものである。そういっても、親として自分の子が離れるのは辛いことで、それに、行かせた子供は実際にきちんと育つか親として心配しなければならないことであった。（V４）では、例えば、孫と自分の子を一緒に育てて、お金に困ったら、孫を売って、自分の子を育てることを表している。孫も血縁の関係ではあるが、子に対する愛情の方が絶対だから、子を自分のそばに置いて、慈しみ育てるのは当然である。

以上の分析によって、親の子に対する愛情は絶対的で、どんな関係より非常に深いものだと分かってきた。日本のことわざに見られる親の愛は、功利を超越すると表現する傾向があるが、今回の資料では、対応するベトナムのことわざは見られなかった。

３．親の愛は盲目的

親の思うほど子は親を思わないと知りつつも、親は自分の子がかわいくて仕方がないのである。だから、自分の子の欠点は見えない。それは以下のことわざに見られる。

（J９）親に目なし

（J10）親のひいき目

（J11）我が子の悪事は目に見えぬ

（V5）Con người ỉa đầu đường thì thối, con mình ỉa đầu gối thì không.

（人の子が道の端にうんこをし、臭い。我が子が膝にうんこをし、臭くない）

（V6）Bênh con lon xon mắng người

（子の肩を持って、考えずに人を叱る）

上の両国のことわざから、親の愛情は自分の子供だけに向けられ、まさに盲目的なことが分かる。

（J９）、（J10）、（J11）は、親は子がかわいいから、なんでも子のことが良いように見えると語っている。何のとりえもないつまらない子でも、優れた子であるように思って、少しでもとりえがあれば、「ひいき目」で見るので、ひどく優れているように思う。反対に、劣っているところや悪いところがあっても、気がつかないことが多い。この中で面白いのは「目なし」である。「目なし」は目の見えないことではなく、ここの「目」は正しい判断力である。それで、（J９）は、親は子供のことになると愛情に溺れて、自分の子が悪事をしてもそれが悪いか正しいかの判断もできなくなったという意味である。

一方、ベトナムのことわざの中には、以上のことわざと同様な表現はないが、（V５）や（V６）もおもしろいと思う。（V５）は文字通りには、他人の子が道の端にうんこをしたら、臭いが、自分の子はすぐ膝にうんこをしても、全然臭くないと語っている。「đầu đường」（道の端）は外、遠い所で、「đầu gối」（膝）は内、近い所である。外が内と、遠いところが近いところ、「con người」（人の子）が「con mình」（我が子）と対立する。ここの対照法は他人と自分の子の差別を強調している。「iả」（うんこをする）という行動は同じだが、他人の子のことに対しては悪いと思ったり嫌に思うが、自分の子のことに対しては良いと思う。

（V６）は、例えば、子供が他人と喧嘩したら、母親は自分の子の方が間違えているか相手の方が間違えているか判断せずに、自分の子の味方をして、すぐ相手を叱ってしまう。それは母の自然な反応である。「lon xon」という擬態語は悪い結果をもたらすことを十分に考えずに急いでするさまである。これは親の愚かさを笑うのである。（V６）と内容も表現も似ている日本のことわざにはこんなのがある。

（J12）子供の喧嘩に親が出る

また、親の盲目的な愛はこのようなことわざにも見られる。

（J13）我が子の自慢は親の常

（J14）子に甘いは親の常

（J15）他人の善人より子の悪人が可愛い

（V７）Có vàng vàng chăng hay phô, có con hay nói trầm trồ mẹ nghe

（母は金を持って見せびらかさず、しゃべる子を聞いてたたえる）

（V８）con vua tốt vua dấu, con tôi xấu tôi yêu

（王の子がかわいい、王が愛す。私の子が悪い、私が愛す）

以上のことわざから、親は千里眼があっても、子に対する愛着で目が覆われるようにな

ることが多いと分かる。両国のことわざを対照比較してみると、表現と内容ともよく似ているものは（V６）と(J12)で、内容がよく似ているものは(J15)と(V8)である。しかし、日本の「目なし」という表現はベトナムのことわざには見られない。

４．親の愛は教育的

親は、いつも子を愛していて、子が立派に育って欲しい、善悪の区別ができるように子に教えたいと思っている。それは次のように表現される。

（J16）かわいい子には旅をさせよ。

（J17）かわいい子は打って育てよ。

（J18）かわいい子には灸を据えよ。

ベトナムでは、次のようなことわざがある。

（V９）Thương cho roi cho vọt, ghét cho ngọt cho bùi

（愛すれば、棒をあげる。嫌いなら、甘えをあげる）

（V10））Yêu con cho vọt vào lưng

（子を愛し、腰を打つ）

（V11）Thương con để dạ

（子を愛すれば、腹の中で）

（V12）Dạy con từ thuở còn thơ

（幼い時から子を教える）

子がかわいいのは親の常である。子を愛するからといっても、いつも親のそばに置いて守るわけではない。そうして、子を安全に守ろうとしたために、かえって子は気が弱くなり親に頼るようになるかもしれない。教育方法としては、子を自分の足で立たせたり、つらいことでいろいろな体験をさせたりするのである。（V9）と（V10）は一つの方法を出す。それは、子供が過ちを犯したら、二度としないように、親に打たれ、罰されたものである。

（J16）の「旅」というのは今日のような旅行だけではない、家を出て離れているところに行くことを言ったのである。知らないよその地に行って、特にそこで働いたりすることは苦しいことであったに違いない。しかし、親の保護のもとを離れて、その苦労を体験すれば、鍛えられて成長するものである。このような内容は（J17）と（J18）にも見られる。

これらは人間の長い間の経験から得られた結論であり、しかし、今日人々はそれをしないようになったようである。

そして、（V11）では、いくら子を愛しても、子がそれを知らないようにすることを意味している。ベトナム語の「bụng」（お腹）は体の部分だけではない、秘密を隠すところである。親がなぜ子を愛しても、その愛情を隠すのかというと、もし子が自分のあれこれを親に思ってもらったり、悪くてもかわいいと思われることが分かれば、自分がいい人にな

るように努力しないで、わがままになるのではないかと心配するからである。だから、外見の表情から見ると、そんな考えを持っているベトナム人は子に対する愛情を表さないので、子供をそんなに愛さないかと思われる。

このように、子は甘やかすより厳しく育てた方が良いという点で、日本とベトナムのことわざは内容的に一致している。

５．親の苦労

子を育てるのに苦労しない親はいないであろう。

母親は、妊娠している時、子供の健康を九月十日間ずっと気にかけ、出産の時、非常な痛みを耐えているのに、子の無事を祈る。子を産んだら、

（J19）子を生みや苦を生む

（V13）có con phải khổ vì con

（子がいると、子のために苦労する）

などのようになる。乳児を育てる時、子がお腹がすいて泣いたら、親は夜中でも起きて食べさせ、子が病気になれば、心配で目も合わせずに看護する。医学が発展していない昔は、乳幼児死亡率が高かった時、子が大病やけがなどで、生きるか死ぬか親は何より心配するものであった。子さえ元気に生きれば、寿命が縮んでも喜ぶという親は少なくない。この点では、今でも依然変わらない。（J19）と（V13）はこういう内容によく似合っている。そして、乳児が成長する間には、

（V14）Con biết ngồi, mẹ rỗi tay

（子は腰を掛けることができれば、母は手が空く）

のように、子が腰を掛けることができないうちは、子が寝ている時を除いていつも子を抱いているので、母の手は空いていないのである。家事をする時にも、子を抱きながらする。

次に、このような表現もある。

（J20）親が痩せると子が太る

（V15）Con đóng khố, bố cởi truồng

（子が褌をすると、父が褌をしない）

（V16）Chỗ ướt mẹ nằm, ráo để phần con

（濡れた所に母が横たわる、乾いている所に子を譲る）

これらは、親の立派な犠牲を示す。(J20)では、子を育てることで、子のために、親は自分の食べ物を減らし、それを子に与えているのである。また、（V15）のように、褌も一枚しかないほど貧しい時には、子にそれを譲り、（V16）のように、自分は寒いのに子を乾いた所に置いて、子が寒くないように守る。（J20、V15、V16）が使っている対照法では、親は子のためにつらくても、どんなこともできることを強調している。愛情がなければ、こんなことはできるわけがないと思う。

６．おわりに

以上のように、日本とベトナムのことわざを対照比較してみると、日本人とベトナム人の考え方、各民族の文化、風俗、習慣の違いと類似が見られる。

両国のことわざの内容から見ると、日本でもベトナムでも、親は子を育てるのは無条件の愛情をもとに、子のためにあれこれ思って、自分は辛い目にあっても最も良いことを子に譲る。そして、子を思う親の心に比べて、親を思う子の心が弱い。

表現から見ると、両国のことわざの中に、どちらにも体の部分が取り入られている。ベトナムの方には「ruột」（腸）、「nước mắt」（涙）、「đầu gối」（膝）、「bụng」（お腹）、「lưng」（腰）などがあって、日本の方には「糞」、「目」などがある。なぜなら、ことわざは人間や人生の事情の批評、あらゆる面の生活の正直な反映だからである。ことわざは民衆の暮らしから生まれたので、言葉が簡単なら簡単なほど、覚えやすい。それに、宇宙の万物ができた後、人間の姿も出現したので、人間にとって体の部分により生活に近いものはないであろう。

また、両国の親の子に対する愛情に関することわざの表現形式の特徴の共通点は比喩表現と誇張法、対句法などが使用されている点である。その他、直接的な表現もよく使われて、意味が一見して分かる。

しかし、ことわざは生活の中から発生したから、各国、各民族の社会背景や風俗習慣によって、表現形式も異なると思う。ここにまとめたことわざには、日本の方は比喩表現がよく使われ、それに対して、ベトナムの方では、対句法がよく使用されている。そして、「子は親の一部」や「子を愛しても、愛情をお腹に隠す」などのようなベトナムのことわざの表現は日本には見られないのに対して、「親の愛は功利を超越する」、「ひいき目」等のような日本のことわざの表現はベトナムにはない。

日本とベトナムの「親子」に関することわざを以上のようないくつかのテーマに分けて対照考察し、そこに見られる表現の仕方と考え方の類以点と相違点を検討してみた。そうすることで、日本の文化、風俗、習慣をもっと理解し、さらにベトナムの文化、風俗、習慣を再認識することもできた。

参考文献

金子武雄　『日本のことわざ　評釈』海燕書房（1982）
金子武雄　『日本のことわざ　続評釈』海燕書房（1982）
浮田三郎　「現在ギリシヤ語と日本語における「親と子」に関する諺の対照研究」『プロピレア』（2004）
浮田三郎　「現在ギリシヤ語と日本語における「金持ちと貧乏」に関する諺の対照研究」『プロピレア』（2005）

小学館　『故事俗信ことわざ大辞典』(1982)
広島大学　『日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集−第 19 期』(2005)
Nguyen Xuan Kinh, Nguyen Thuy Loan, Phan Lan Huong, Nguyen Luan『Kho tàng tục ngữ người Việt（ベトナムのことわざ事典)』文化情表出版社 (2002)